

学会創立20周年記念OS

産学連携・異種異質連携を再考する

本学会創立以来を振り返り次の20年を構想する

産学官公民金連携＝事業組織と研究者・学会の連携が生むもの

湯本 長伯

社会構造設計研究所所長
九州・大学開物成務塾塾長
工学博士

産学連携学会・名誉会長(学大系・専門職能) 知財学会(知財新領域)
地域開発学会・会長代行 環境設計学会・会長
日本建築学会・終身正会員 同・情報設計委員会幹事
最高裁判所・知的財産専門委員(第1～9期)
日本インテリア学会名誉会員 福岡インテリアコーディネーター協会名誉会長
nagyumt@kyudai.jp 建築系新規学部創設アドバイザー

主旨説明

『単純に言えば、本学会20年を振り返りこれからの20年をどうするか考える』ということ。しかし本学会の社会的責任を考えれば、今後の我が国社会を考えざるを得ない。

『我が国社会の現況は、将来に大きな問題が控えている。人口減少、主要産業の衰退、次世代産業の育成不良、工業生産頼みの硬直化した産業構造、創造性無視の詰込み教育、等々問題山積である。更に、貿易構造・国際体制、国際競争への戦略・戦術・国力動員態勢への努力不足等々により、国力維持・強化に大きな衰退が生じる』

産学連携・異種異質連携の意義＝プロパテント・プロ知的財産、大学等の研究管理・計画等、多様なウィングが枝分野に拡げられたが、
『これまで連携融合して来なかった異種異質分野の新しい連携融合』は、単純だが有効で、且つ、未着手・未挑戦のことも多く、寧ろ21世紀になり意義は高まっていると思う。

主旨説明

『単純に言えば、本学会20年を振り返りこれからの20年をどうするか考える』ということ。しかし本学会の社会的責任を考えれば、今後の我が国社会を考えざるを得ない。

『本学会設立20周年に当たり、歴史を踏まえて活動の見直しを行うだけでなく、数年から十数年先に見える我が国の衰退に対して、本学会としても何とか事態好転の一手を打つべきである』（産学連携のニーズ）

その要は教育投資・人材投資であり、明治近代化期の先人に倣うべきで、現在でも最も有効で効率的な投資である。具体的な方策を考える前に、共通的な理解を持つ場としたい。

【目的】

※異種異質連携・産学連携＝創造性発揮の第一方法論である

※異種異質連携・産学連携は知的生産に役立つ→どう活かすか

※異種異質連携の基盤たる多様性が必要＝我が国内多様性の掘起しと涵養が地方第一の理由

※方法論の更なる展開を見据えつつ、学の構造や研究方法についても基盤的な理解を得たい

※構成＝①講演の部 ②討論の部 ③まとめ・提言の部

主旨説明

『単純に言えば、本学会20年を振り返りこれからの20年をどうするか考える』ということ。しかし本学会の社会的責任を考えれば、今後の我が国社会を考えざるを得ない。

グローバル化も同じような効果を齎したが、『他より安い店で買う』だけでは『質』的恩恵は得られない。知の生産としての本質をしっかりと意識し、『これまでに無いもの・ことを生み出す』という本質を見失うことが無ければ、『産学連携・異種異質連携』はこれからの社会・地域活性化に有効であり続けると思われる。

此の企画の準備過程で、20周年と言っても『設立当時の昔話・自慢話』をしてもしょうがないという意見もあったがそれは当然で、大学内でも政府内でも、『産学連携』とは何だったかという戸惑いや迷いも増大している今こそ、学会設立以来20年の挑戦を凝縮して振り返り、戸惑いや迷いを払拭して、これからの20年に向けて、個人としても学会としても、『これからどう在るべきか』を共に考えたいと思います。

進行説明

- ①ショートレクチャーの部（発表8分質疑4分）
- ②ディスカッションの部（2テーマ／25分ずつ）
- ③まとめの部（10分）

※学会設立以来の振り返りから今後を考え議論するということになると、どうしても年寄りの出番が多くなるが、創立以来の多様で多数の実績と発表や論文論考の蓄積＝知的資産を活かしつつ継承し、より活性化して行くためのコメントを、より若い世代にもお願いしたい。

未来に向けたOSにするため、①②を通して老人の昔話にならぬよう、お目付け役も含めて、3人のコメンテーターをお願いしております。

副会長お2人のうち若い伊藤先生に登壇戴きましたが、もう1人の副会長・飯田先生には、フロアからコメントを戴きたいと思っておりますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

進行説明

- ①ショートレクチャーの部（発表8分質疑4分）
- ②ディスカッションの部（2テーマ／25分ずつ）
- ③まとめの部（10分）

未来に向けたOSにするため、①②を通して老人の昔話にならぬよう、お目付け役も含めて、3人のコメンテーターをお願いしております。

①北村寿宏・島根大、学会学術委員長

・学会設立時に大きな支援をし、島根大でのフォーラム開催や各種全国会議での支援等、陰ながらの尽力は記憶に新しい

②内島典子・北見工大、学会広報委員長

・第1回大会から研究発表に勤しみ、必ずしも産学連携に馴染みのある地域環境ではない中で、産学連携を起点に地域・大学の革新に関わって成果を上げ周囲を変えて、ご本人も教授として確固たる拠点を築いて来た。

③伊藤慎一・秋田大学、学会副会長

・実務・研究発表いずれにも熱心で、先にはコロナ禍の中、新しいリモート参加技術を基盤に、フルリモートで秋田大会を成功させた。若い世代の期待の星であり、学会運営への反映も期待する。